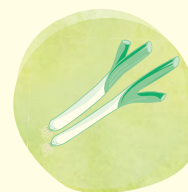




テクニカル ダイアリー



夏越し後の管理

土寄せは、9月上旬から下旬にかけて、気温の低下を確認してから開始します。夜温が下がる作物へのダメージが少なくなるので、土寄せのタイミングです。

夏に猛暑が続いた場合は、細根が傷んで肥料を十分に吸収できないことがあります。極端な追肥は控え、少量ずつこまめに施肥しながら、根の回復を待ちます。乾燥時に土を動かすと、根を傷める原因になるため、土寄せは降雨後に行いましょう。

病害虫対策

シロイチモジヨトウ

シロイチモジヨトウは老齢になるに従い、薬剤の効果が低下します。圃場をよく観察し、卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけたら、すぐに除去しましょう(写真①②)。

薬剤散布は、若齢幼虫のうちに表①を参考に行ってください。殺卵や卵の孵化抑制効果の

必ず「秋耕」をしましょう！

「秋耕」とは、稲わらを秋にすき込むことです。翌年の稲の良好な生育のために、代かき直前の春先ではなく、稲刈り直後の気温が高い時期に、稲わらをすき込みましょう。

「秋耕」のメリット

●良好な初期生育

微生物が稲わらを分解する際に、酸素を必要とします。すき込み時期が遅いと、田植え後まで稲わらの分解が続くため、土壌中の酸素不足による根腐れを引き起こします。

根腐れや活着遅れを防ぐため、田植え前までに分解が進むよう、秋耕をしましょう。

●害虫の発生を抑制

二番穂を放置すると、イネカメムシなどの害虫の増殖源となります。また、ジャンボタニシ(正式名称スクミリンゴガイ)は、耕うんによって物理的に破壊することで、翌年の発生数を減らすことができます。

ある薬剤(マツチ乳剤等)をローテーションに取り入れると、次世代の害虫密度を下げることでできます。



写真① シロイチモジヨトウの若齢幼虫
※ルーラル電子図書館より引用



写真② シロイチモジヨトウの卵塊

●ネダニ(ロビンネダニ)

ネダニ類は、連作した圃場で多く発生する傾向があります(写真③)。主な発生源は、前作の作物残渣に残っていたものと、ネダニが寄生した苗の持ち込みです。そのため、ネダニを圃場に入れないこと、圃場で増やさないことが重要です。定植時は、健全苗を選ぶなど、耕種的防除を併用しましょう。

ネダニは土壌のpHが低い(酸性)と発生しやすいため、pH6.0を目安に石灰で矯正します。生育初期に被害を受ける

「秋耕」のポイント

●推奨時期

稲刈り直後の9～10月にすき込みましょう。目安は地温15℃以上の時期です。

●耕す深さ

作土が浅いと根が伸びにくく、倒伏しやすくなるため、深さ15cm程度を目安に深耕を行いましょう。ただし、排水性の悪い圃場では5～10cmの浅耕にとどめることで、すき込まれた稲わらが酸素に触れやすくなり、腐熟が進みやすくなります。

●おすすめ資材

稲わらの分解には腐熟促進材(表③参照)を施用すると効果的です。雑草の発生が多い圃場では、翌年の発生密度を抑えるため、耕うんの1～2週間前に茎葉処理除草剤を散布しましょう。

●ヒエヒレタゴボウ等の種子の発芽抑制

……プリグロックスL

●オモダカ・クログワイ等の塊茎の形成阻害

……ラウンドアップマックスロード

ケイ酸資材で土づくり

ケイ酸には茎葉を硬く丈夫にする働きがあり、稲株が倒れにくくなるとともに、病害への抵抗が増します。さらに、根の活性が高まることで、稲株の温度を下げるクーラー効果によって高温障害(白未熟粒)の発生抑制も期待できます。



写真④ アグリ革命



写真⑤ アグリ革命アクア



写真⑥ 農力アップ

表③ おすすめの土づくり肥料・腐熟促進材

目的	商品名	施用量 (10a当たり)	特徴
稲わらの腐熟促進	石灰窒素	10～20kg	微生物の増殖に必要な窒素を20%含む。
	アグリ革命	2kg	酵素の力によって稲わらの分解を促進する。液剤(アクア)は、雑草対策として茎葉処理除草剤との混用が可能。
	アグリ革命アクア	100mL	
ケイ酸の補給	ケイカル(粉)	100kg	ケイ酸31%を含む安価なケイ酸資材。
	農力アップ	60kg	利用効率が良いため施用量が少なく済む。ケイ酸20%のほか、鉄やマンガン等の微量元素も含み、秋落ち対策にも効果あり。

稲わらにもケイ酸は含まれていますが、稲わらのすき込みだけでは必要量を十分に補えませんが、倒伏しやすい、年々収量が落ちている、米の品質が悪いといった悩みのある方は、秋耕の際にケイ酸資材(表③参照)を併せて施用しましょう。

表① シロイチモジヨトウの防除薬剤

薬剤名	IRACコード	希釈倍率	使用時期	使用回数
ディアナSC	5	2500～5000倍	収穫前日まで	2回以内
アニキ乳剤	6	1000～2000倍	収穫3日前まで	3回以内
ヨーバルフロアブル	28	2500～5000倍	収穫3日前まで	3回以内
グレーシア乳剤	30	2000～3000倍	収穫7日前まで	2回以内(散布)
プロフレアSC	30	2000～4000倍	収穫前日まで	3回以内
プレオフロアブル	UN	1000倍	収穫3日前まで	4回以内

表② ネダニの防除薬剤

薬剤名	IRACコード	希釈倍率・使用量	使用時期	使用回数
アプロードフロアブル	16	500～1000倍 1～3L/m ² 株元灌注	収穫14日前まで	1回
トクチオン乳剤	1B	2000倍 3L/m ² 株元灌注	収穫7日前まで	3回以内
グレーシア乳剤	30	2000倍 1L/m ² 株元灌注	収穫21日前まで	1回(灌注)
フォース粒剤	3A	9kg/10a 作条土壌混和	定植時	2回以内 ※定植時までと定植後の処理はそれぞれ1回以内
		6～9kg/10a 株元散布	収穫30日前まで	

と生育遅延のほか、軟腐病菌の侵入による欠株など二次被害につながるため、初期の防除を徹底する必要があります。

定植前または定植時に、表②を参考に薬剤による土壌処理を行いましょう。ネダニは土壌中にいるため、株元灌注や土壌混和処理を丁寧に行うことが効果的です。

農薬のラベルには分類コード(RACコード)が表示されています。



写真③ ネダニによる茎盤部の被害

ます。薬剤抵抗性を防ぐためにも、同一コードの薬剤の連用は避けましょう。